

# 学校で行う生活習慣指導の推進の方策

## —養護教諭の職務の特性を活かした展開—

人間発達教育専攻

学校心理・発達健康教育コース

M11029F 青木 志保

### I 研究目的

子どもの生活習慣の確立は重要な健康課題の一つであり、教育活動への影響も大きいことから望ましい生活習慣を身につけるための指導を学校教育でも積極的に行っていく必要がある。しかし、指導の実施状況は、学校の実情や教職員の生活習慣指導に対する関心・認識の在り方などによって差が見られ、必ずしも課題として優先される内容とは言えない。

本研究では、学校での生活習慣指導の実践を促進・阻害する要因を明らかにするために、児童生徒の生活習慣やその指導の現状に対する教職員の認識および指導実践の内容を調査した。さらに、その結果に基づき、生活習慣指導を推進する具体的な方策や養護教諭の役割について検討することを目的とした。

### II 研究方法

#### 1) フォーカスグループインタビュー(FGI)

質問紙作成の前段階として、2012年1月に管理職を含む小・中学校教諭(小・中学校各3人)を対象に、半構造化形式のフォーカスグループインタビューを実施した。インタビュー内容は、児童生徒の生活習慣に対する認識や指導の状況を問うもので、そこから抽出されたカテゴリ等を参考にして本調査の質問紙を作成した。

#### 2) 生活習慣指導に関する質問紙調査

2012年7月～9月にA県(小学校3校, 中学校2校), B県(小学校6校, 中学校4校)の教職員

およびB県養護教諭を対象として、無記名自記式の質問紙調査を実施した。小学校335人(内、養教94人), 中学校183人(内、養教62人)計518人から回答が得られ(回収率74%), 分析対象とした。調査内容は、「児童生徒の生活習慣やその指導に対する認識(20項目)」「現任校の指導の現状(10項目)」「現任校での自身の指導実践, 教職員間の連携体制(15項目)」であった。また、養護教諭には、「現任校での生活習慣の指導実践(4項目)」についても調査した。

統計処理にはSPSS PASW Statistics 18を使用し、各質問項目への回答状況、校種および職種(一般教諭, 養護教諭)の回答の違いを $\chi^2$ 検定により検討し、下位検定には残差分析を行った。有意水準は5%とした。

### III 結果および考察

#### 1) フォーカスグループインタビューの結果

児童生徒の生活習慣や指導に対する認識は、【生活習慣と様々な課題との関連についての認識】、【児童生徒についての認識】、【自己管理能力についての認識】、【家庭の役割についての認識】、【指導の必要性についての認識】、【学校での指導方法についての認識】の6つのコアカテゴリが出現した。指導実践の促進・阻害因子は、同じコアカテゴリとし、【学校の特色】、【指導の計画性】、【教諭による指導】、【養護教諭による指導】、【保健学習での指導】、【連携】、【家庭への働きかけ】、【具体的方策】の8つのコアカテゴリが出現した。

## 2)生活習慣指導に関する質問紙調査の結果

### (1)児童生徒の生活習慣やその指導に対する認識

「安定した学校生活」「学力・体力向上」「情緒の安定」「生涯の健康生活」「生徒指導」「家庭の影響」に生活習慣の確立が関連していると回答した教職員は、職種を問わず90%を上回っていた。また、生活習慣指導に対しては、職種を問わず85%以上が学校教育での指導の必要性を認識していた。一方、「指導効果」「指導の優先度」等の項目は、回答結果にばらつきがみられ、教職員間で認識に差があることが推察された。養護教諭でも「中心となって指導を推進する」と認識しているものは、30%に満たなかった。

### (2)現任校の指導の現状

養護教諭の調査結果では、93.6%が「生活習慣指導が保健教育計画へ位置づけられている」と回答していた。生活習慣指導に限らない保健教育には、70%近くの養護教諭が計画立案や指導者として関与しているが、「生活習慣に関する保健指導」は、53.2%が計画的に行っていない。また、「指導は担任裁量で行っている」と回答した者が71.9%であった。さらに、現状への共通理解の程度は、実践内容や学校ごとに違いが見られた。

### (3)現任校での自身の指導実践

児童生徒に対する「日常的指導」「たより・資料」「個別指導」は、80%前後の教職員が実践していた。一方、「保護者への講話」「健康相談」等、保護者への取り組みは、半数近くの者が中庸・否定的回答であった。保護者への実践は、児童生徒の実践に比べると、積極的には行われていない現状が示唆された。一般教諭と養護教諭の実践内容を比較した結果、一般教諭よりも養護教諭はたよりや資料を活用していた。しかし、児童生徒や保護者への直接的な取り組みは、一般教諭よりも実践していないことが推察された。

### (4)養護教諭の生活習慣指導の実践状況および意識

児童生徒に対する指導では、100%の養護教諭が「たより・資料」を通じた指導を行っていた。次いで、「児童生徒保健委員会」「個別指導」も60%前後の実施率だった。これらの項目と比較すると、「保健学習(19.7%)」や「保健指導(身体測定時, 38.9%)」の実施率は低かった。保護者への情報提供でも「たより・資料」は99.4%が活用していた。一方、保護者を対象とした健康相談の実施率は17.8%と低かった。

生活習慣指導の推進に重要だと思うことは、「教職員の理解(78.3%)」「教職員との連携(72.0%)」「現状の課題を踏まえた指導(70.7%)」の順で割合が高かった。指導推進の際に課題となることには、86%の養護教諭が「時間の確保」と回答していた。

なお、養護教諭の生活習慣指導の実践状況や意識は、いくつかの項目において校種・勤務年数・経験年数・平均来室者数等の属性によっても違いがあることが確認された。

## IV まとめ

多くの教職員が、学校での生活習慣指導の必要性を感じていた。それでも実践に結びつかない背景には、生活習慣指導の効果や優先性、中心となって推進する者の存在が不明確といった課題があり、そこに生じる教職員の認識の差が阻害因子になっていると推測された。

養護教諭は学校保健全般に関わっており、児童生徒の健康課題や指導の現状を把握しやすい立場にある。このような職務の特性を活かし、生活習慣指導を推進する際に中核的役割を担うことが期待される。

主任指導教員 西岡 伸紀  
指導教員 西岡 伸紀